

社会文化的アプローチによる道徳性研究の可能性

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 臼井 東

筑波大学心理学系 茂呂 雄二

The feasibility of extending the socio-cultural approach to moral development

Azuma Usui and Yuji Moro (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to design the study of morality in terms of sociocultural approach. At first, we examined our view of moral. Then, we defined moral as social construction that we negotiate and construct its meaning in social interaction. And in accordance with such a definition of moral, we examined the concept of "human" and "interaction" that we have regarded as axiomatic. Consequently, we found that the sociocultural approach to morality has rich and helpful implication not only for the study of morality but also for moral education.

Key words: morality, moral, sociocultural approach, moral education

はじめに

これまでさまざまなメディアを通して、青少年犯罪の多発や凶悪化が叫ばれてきたが、昨今では、さらにいわゆる「マンション偽装事件」や「ライブドア事件」など、社会全体のモラル低下が叫ばれるようになってきた。そしてこうした状況への対応策として、学校教育における「道徳教育の強化」を求める声ますます強くなってきている。そうした声を受けて、2002年度より、わが国では、小・中学校の道徳の授業において『心のノート』が教材として配布され、道徳教育の充実が目指されている。しかし、この『心のノート』をめぐる、現在でもその賛否をめぐって、研究者間、そして教育現場においても激しい論争が展開されており、コンセンサスを得ているとはいえない状態である。

このような状況は、まさに道徳をめぐる混乱状態と言ってよいだろう。この混乱はなぜ生じるのだろうか。この問いが本稿で主に考察する問いである。

この問いに答えるために、本稿ではまず、なぜ人々の間で道徳をめぐる混乱が生じるばかりか、さらには道徳教育さえも混乱してしまうのか、その根

源を考察したい。こうした混乱を解消するためのひとつの可能性として、社会文化的アプローチから見た道徳性研究のアイデアを紹介し、道徳および道徳性のとらえなおしを提案したい。そしてそれを踏まえて、今後、混乱している道徳教育にとってひとつの進むべき可能性を提示したいと思う。

1. 問題と目的

1.1 道徳性はどのようにとらえられてきたか

道徳性 (Morality) とはいったい何だろうか。まずは身近なところから考えてみよう。

昨今、「道徳」という言葉をよく耳にする。事実、近年、マスメディア等により、少年事件が数多く取り上げられるようになり、そうした問題へのひとつの解決策として、道徳教育の強化がしきりに叫ばれてくるようになった。そして1998年（平成10年）、そうした声を受けて、中央教育審議会は「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—」という答申を発表し、そこで子どもの道徳性の育成を促進するべく、家庭・地域・学校における道徳教育のあり方の見直しを訴えた。具体的

は学校における道德の時間の確保、教材の工夫、地域との連携、子どもの主体的な思考を尊重することなどがそこでは提唱されている。また『小学校学習指導要領』の「第3章道德」では、「道德的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道德性を養う」と書かれている。

では、ここで冒頭の問い、つまり「道德性とは何か?」、という問いに戻ろう。上述した中央教育審議会の答申と『小学校学習指導要領』から読み取ることができるのは、少なくとも「道德性」とは、まず「道德」というある社会という集団における諸々の決まり事やルールを、ある社会の構成員がその社会に適應するための必要に迫られて主体的に学習していくことによって得られる個人の能力とされているということであろう。そしてさらに、「道德教育」とは、学校教育において、社会の決まり事やルール<道德>を、教える<教育>もの、だと考えられていることも、そこから読み取ることができる¹⁾。

こうした「道德」および「道德性」に対する理解は、決して昨今になってにわかに一般的になったというわけではない。心理学、そしてさらには教育学においても、こうした「道德」および「道德性」に関する理解および前提は、両者が研究の対象となつてから今日に至るまで、理論的に中心位置を占めてきたのである。

こうした道德および道德性に関する前提を3点にまとめてみよう。まず第1の前提として、「道德とは普遍的な原理である」、という前提がある。第2の前提は、「個人は普遍的な道德を学習し、それに基づいて自律的に行動する」という前提である。そして第3の前提は、「道德教育とは、個人に道德を教え、将来、社会において自律的に行動できる個人を育成する場である」という前提である。

では、このような「道德」および「道德性」に関する理解の根源はどこにあるのか。次にそれを考察しよう。

1.2 現代社会と道德性

上で述べたように、一般的に、「道德は普遍的なものであり、それは個人に道德性と言う特性として内面化する」、という前提は極めて根強いものである。Gergen (1994, 1999) は、その理由として、そうした道德観が現代社会の制度を生み出し、維持しているという点において、もはやこのような道德観と現代社会とは切り離せない関係になっているからであると指摘している。例えば、現代社会において、ある個人が法律や道德秩序を逸脱して罪を犯せば、その個人が罰せられ、更正されるべきだとされる。このことは多くの人にとって自明で当然のことと思われているであろう。では、なぜ個人は自分が犯した逸脱について、その責任を負わなければいけないのか。それは個々の人間がその内面に備えている道德性にそつて合理的に行動できる能力を持っているにもかかわらず、あえて自ら法律に背いたからである。だからこそ、取調べや裁判などにおいては、「なぜ、その人は逸脱行為をしたのか?」「動機は何か?」、「どのような精神状態だったのか?」という個人の内面に主に焦点が当てられるのである。

このように道德を普遍的なものとし、それが個人に内化され道德性という特性となるという前提は、私達の生きている現代社会の根底を支えていると言え、こうした前提を抜きにしては、現代社会は崩壊してしまう恐れがあるのだ。

1.3 道德性をめぐる理解および前提の混乱とその問題点

このように、上述したような道德性の方と現代社会とは密接な関係がある。それゆえ、道德教育や道德性研究においても、多くの場合このような見方を前提としている。具体的には「学校という場は子どもが主体的に思考し、自立的に行動できる人間になるために、普遍的な道德を学ぶ場である」という見方である。しかし、こうした「道德性」に関する中心的な理解・前提に基づいて、研究や教育実践がこれまで行われてきた結果、現在さまざまな問題が露呈してきている。それは、「道德」および「道德性」という概念の定義や性質というものがはっきりしないということであり、その結果、心理学においては、道德性研究は現在、「メタ理論的、理論的、方法的な限界」(Tappan, 2006)に直面し、教育学、特に現場の教育実践においては、こうした前提に基づいてデザインされた道德授業を実際に受けた子どもの日常場面での道德的実践の弱さを訴える教師が多く出てきているという(中戸ら, 2005)。つまり従来の「道德観」および「道德性観」は、道德性研

1) 中戸ら(2005)は、「これまでの道德教育は、大人が子どもに特定の価値観を教えると言う前提で考えられてきた。」と述べている。そして、道德教育というと、「人生訓を説教するような熱いイメージしか持てなかった」とも述べている。こうした現象こそ、まさに「道德」が何らかの「価値」もしくは「徳目」として想定され、「道德」を「教育」することとは、まさに大人が子どもに対して、社会の価値観や徳目のような「道德」を教え込むという、一般的な道德および道德性に対する理解である。

究および実践的な道徳教育活動においても、その影響力、説得力を失いつつあるのである。

1.4 もうひとつの道徳性研究

ではこうした混乱を解消するためには何が必要だろうか。そのためのひとつの方法として、本論文では上述したような道徳性を考える際には当然とされてきた前提を問い直すということを提唱したい。

現在、心理学の分野では伝統的な心理学の解体と再構築を目指すセクターが登場しつつある(茂呂, 2001)。そのセクターをリードしているのは、「社会文化的アプローチ」(Wertsch, 1991)や「社会構成主義」(Gergen, 1994)と呼ばれる立場である。これらの立場とも、実際にはそれぞれさまざまなバリエーションがあり、そのことがこれらの理論を深く豊かにしているともいえるのだが、厳密には定義しにくいのが特徴である(松嶋, 2005)。しかし、あえて共通項をあげるとすれば、両者とも、現実がそれを見る私たちとは関係なく、ア priori に存在しているという前提を留保し、現実とは文脈の中で当事者たちが言語を媒介にして構築していくものであるという立場を取っているということである(石黒, 2004; 松嶋, 2005)。

こうした新しいセクターが掲げている前提は、まさに本研究において行おうとしている、「道徳性」の再構築という意図と合致するものである。そこで本研究では、こうした理論の中でも「社会文化的アプローチ」に着目し、この観点から新たに道徳性研究の可能性を検討する。

2. 社会文化的アプローチ

ここでは、本研究が依拠している社会文化的アプローチについて、まずそのアイデア・特徴を紹介したい。

2.1 社会文化的アプローチとは

心理学は近年、ますます細分化しつつある。その様は、岩下(1999)が述べているように、まるで「ぬえ」のようである。心理学の各分野が細分化し、それぞれの「タコツボ」(丸山, 1961)において研究が進められた結果、確かに過去に比べて、現在私たちはより多くの研究成果を目にすることが出来る。しかし、こうしたことにより失ったものも少なくなかった。それは人間のこころというものをあまりに細分化したがゆえに、人間のこころに対して一貫した説明を行えなくなってきたという点である。それは、道徳性研究においても例外ではない。

ピアジェやコールバーグに代表される認知発達アプローチは、道徳性を個人の認知能力に帰属させ、彼らの流れを汲んだ後の研究者たちもその能力をさまざまな能力や個人特性に細分化していったのである。しかし皮肉なことに、ではこうした成果は現代社会においてどのような意味があるのか、また道徳性と社会的・文化的な文脈との関係はどのようなのか、道徳性は実践にはどういう意味を持つのか、といったような問いにはもはや心理学は答えられなくなってしまったのである。

こうした問題に取り組む立場として、近年注目されているのが社会文化的アプローチである。

このアプローチの提唱者である Wertsch (1991, 1998) によれば、社会文化的アプローチとは、「人間の心的過程と文化的、歴史的さらには制度的な状況との本質的な関連性を説明していくこと」を基本的な目標とするアプローチである。田島(2003)が指摘しているように、従来の心理学研究では、認知機能が社会文化的状況のどちらかを基礎的なものとしてとらえて、そのどちらか一方で他方を説明するというものがほとんどであった。これは道徳性研究においてもそのまま当てはまる。ワーチは前者の認知機能から文化的・制度的・歴史的な文脈を説明しようとする立場を「方法論的個人主義 (methodological individualism)」と呼び、後者の社会的な事実から個人を理解しようとする立場を「社会還元主義 (social reductionism)」と呼び、両者を否定している。なぜならこの両者とも、人間と社会とを区別し、人間の精神機能をあたかも文化的に真空の状態としてとらえてしまっているからである。ここにワーチは、現在の心理学の抱える問題の根源を見るのである。しかし、こうした立場とは対照的に、社会文化的アプローチでは、両要因を分けることなく、複雑なままの全体をとらえようとするのである。具体的には、まず人間の心的な行為を分析の対象として、それを文化的・歴史的・制度的なものとして切り離さずに、むしろそういった文脈の中で、それがどのような文化的な道具によって媒介され、実践されているのかをとらえようとする。こうした社会文化的アプローチの立場は、個人と社会の中間に位置を取るところから、「中間に身を置く (live in the middle)」(Holquist, 1994) 立場と称される。

上述したような社会文化的アプローチが提唱する「行為」、「媒介」、「社会文化的」という3つの重要な用語は、これまでの心理学ではあまり馴染みの無い概念であり、詳細に検討する必要があるといえよう。それにより社会文化的アプローチの特徴をとら

えることが出来ると思われる。

そのため次にこの3つの概念についてそれぞれ検討する。

2.2 分析対象としての行為

上述したように社会文化的アプローチが対象とし、分析単位としているのは行為 (action) である。では行為とはなにか。Wertsch (1998) は、「発話と思考を含む人間の行為は、基本的には、行為が生起する文化的、制度的、歴史的な文脈 (環境) によって形成される」と述べている。つまり行為とはそもそも本質的にそれをとりまく文脈とは分離できないものであり、後から文脈を付加されることをも許さない複合的な概念なのである。では、行為を分析単位とすることはどういう意味を持つのだろうか。

行為を分析単位に位置づけるということは、人間という存在のとらえ方の再考を促すことである。これまで、ほとんどの心理学研究では人間は、環境からの影響をただ受動的に受け取る存在としてとらえられてきたか、もしくは個にのみ注目して環境は二次的にとらえるという、両極端の立場が取られてきた。Wertsch (1991) によれば、前者の人間を環境から一方的に影響を受ける受動的な存在としてとらえる立場は、そのルーツを Locke (1852) に求めることが出来るという。行動主義などはこの見方から強い影響を受けているといえる。一方後者の立場は、デカルトの影響を強く受け、人間の精神を内的なカテゴリーと構造という普遍的なものとしてとらえ、環境を基本的には生得的に備わっている知の枠組みを刺激する素材に過ぎないととらえる立場である。チョムスキー (Chomsky, 1966) は、このデカルト派の立場であることを自称している。道徳性研究においては、ピアジェ (Piaget, 1932) やコールバーグ (Kohlberg, 1987) に代表される認知発達アプローチという後者に近い立場が主流であるが、近年、文化心理学の立場から「道徳スクリプト」を提唱している東 (1997) の立場は前者に近いといえるだろう。

しかし、社会文化的アプローチが提唱する分析単位としての行為というアイデアは、こうした2つの両極端の立場を否定する。Wertsch (1991) によれば、行為を分析対象としてみるということは、人間を行為を通して自身はもとより、環境と接触し、それを創造するものと見なすことを意味しているという。社会文化的アプローチにおいて人間は、このように環境の制約も受けつつも、そうした中で主体的に環境を変革していく存在としてとらえられているのである。

2.3 媒介された行為という見方

上述したように、社会文化的アプローチは個人と社会という2項対立的な見方を避ける。その代替案として社会文化的アプローチが提唱しているのが、「媒介された行為」(Wertsch, 1991) という概念である。これは人間の精神活動と言うものは、社会文化的な活動の産物である文化的道具 (cultural tools) によって支えられているというものである (佐藤, 1999)。ここで言う文化的道具とは、いわゆる技術的な道具はもちろん、記号や言語といったような心理的な道具のことをさしている。ヴィゴツキーが焦点を当てたのは後者の心理的な道具であった。つまり行為とは個人的なものであると同時に社会文化的なものでもあるのだ。

よって、行為を分析対象とするということは、それを社会文化的な文脈の中でとらえるということの意味しているのである。

2.4 社会文化的であることの意義

「社会文化的アプローチ」という言葉だけでは、私たちは単に個人の心理を考える際に、社会や文化と言う変数を考慮する立場を考えてしまうかもしれない。もちろん社会文化的アプローチは、人間の精神に対して社会や文化というものが持つ重要性を認めるものである。しかし、それは決して個人と社会・文化とを二項対的に見るということではない。つまり社会文化的アプローチでは、どちらかが一方に影響を与えるという見方をしないのである。石黒 (2004) は、この社会文化的アプローチの見方を、ある子どもの「学力不振」を例に説明している。社会文化的アプローチの見地から言えば、この「学力不振」というものは、子ども個人に還元できる問題ではないし、逆にすべてその子どもを取り巻く外的なものに全て還元できるわけでもない。社会文化的アプローチが光を当てるのは、「その子どものできなさを可視化する文脈はどのように作られるのか」という点である。そうした「できなさ」を可視化する文脈と言うのは、当然その教室の関係性や歴史性というローカルな文脈から、学校全体の文化というマクロな文脈まで考えられる。だからたとえ「学力不振」というレッテルを子どもに貼り付けて、その子どもだけに問題を帰属させ、この問題に対処しようとしても、それは本質的な解決にはならない。このような「できなさ」を可視化する文脈を生成する社会文化的装置を発見し、それを検討することによってしか、「学力不振」という問題を真に解決することは出来ない、と社会文化的アプローチでは考えるのである。

このように社会文化的アプローチは人間の発達や学習を、個人に内在する能力の問題にしてしまう運命論から解放し、それらをより広い視点からとらえる視座を提供するのである。

3. 道徳をとらえなおす

3.1 伝統的な道徳観とその問題点

ここまでは、いわゆる今日における一般的な「道徳」および「道徳性」の理解として、前者はある社会の「決まり事やルール」(中戸ら, 2005)であり、後者はそうした「決まり事やルール」(道徳)を尊重し、そうしたものを学習・内面化することによって発達する個人の能力であるとされていると述べた。

ここでは、まずこの「道徳」及び「道徳性」をめぐる従来の伝統的な見方を紹介し、それが抱える問題点を指摘したい。

伝統的かつ自明とされる道徳観に心理学の立場からメスを入れているのが、社会構成主義を提唱しているケネス・ガーゲン (Gergen, 1994, 1999) である。ガーゲンは社会構成主義を提唱する際に、道徳の問題を極めて重要視している。

ガーゲンによれば、こうした伝統的な道徳観に強い影響を与えているのは、カントの定言命法からロールズに至るまでの道徳哲学や、ロマン主義、モダニズムなどであるという。こうした立場は、使用される文脈を超越する普遍的な道徳原理を追及しようとしたのである。ピアジェやコールバーグなどもまさにこうした立場にある。

しかしこうした道徳観がもたらした問題は深刻であり、それは次の3点あげられる。

まず第一の問題としては、普遍的な道徳をあまりに追求するばかりに、他の道徳を抑圧してしまう危険性があるということである。その最たるは、戦争である。戦争を正当化するための言説は、必ずと言っていいほど、道徳的な意味合いを含んでいる。つまり、普遍的な道徳を志向する余り、他の道徳を尊重する人々を抑圧し、そうした人々との対話を閉ざしてしまう恐れがあるのだ。

第2の問題としては、道徳的な問題を個人に閉じ込めてしまう恐れがあるという点が指摘できる。例えば、ロマン主義やモダニズム、そしてピアジェやコールバーグも、基本的に人間は合理的・理性的な存在であり、道徳的な意思決定を行う能力を先天的に備えているという前提を持っている。しかし、この前提は裏返せば、反道徳的な行動をした個人は、そうした能力が欠如した人間であるというレッテル

を貼られてしまい、その問題が個人の中だけに閉じ込められてしまう恐れがある。つまり、問題を極めて局所的にしてしまい、本当の問題を隠蔽してしまう恐れがある。

第3の問題としては、マッキンタイア (MacIntyre, 1984) が指摘しているように、普遍的な道徳原理を追求すると、道徳原理が文脈から離れ抽象化してしまい、日常の実践と乖離してしまう恐れがあるという点である。

3.2 関係性のなかの道徳という見方

では、こうした問題点を克服するにはどうすべきか。本研究では、そのひとつの答えとして、「関係性」の中の道徳という見方を提示したい。

上述したように社会構成主義では、道徳を含む「現実」や「現象」というものはアプリオリに存在しているのではなく、人々がその場の文脈において、言語を媒介にして構成されていくものだという社会文化的アプローチと共通する立場を取る。

ガーゲンが主張しているのは、何が適切で、どのような行為が許容されるかと言う道徳的秩序というもの、ある特定の文化の中ではじめて意味を獲得し、さらに関係の中で構築され、維持されていくものであるということである。つまり関係性の中でしか、道徳というものは意味を持ち得ないし、力も持ち得ないのである。それゆえ、道徳というものは、私たちに具体的な行為を指定できないし、ある行為も立場によって道徳的であったり、反道徳的であったりする。よって、ここで重要となることは、何が普遍的な道徳原理なのかを探索することではなく、道徳的とされる行為が関係性の中でどのように生じ、構築されていくのかを見ていくことであろう。こうしたシフトをガーゲン (1994) は、「倫理学から実践へ」というタームで説明しているが、社会文化的アプローチによる道徳性研究が目指すべきは、まさに実践という、一見すると取り留めの無い日常の行為から、道徳性をとらえていくという視点である (茂呂, 2001)。

4. 道徳性と人間

4.1 従来の道徳性研究における人間観とその問題

従来の道徳性研究においては、そのほとんどが人間というものを合理的・理性的で、自由な存在としてとらえてきた。例えばピアジェやコールバーグにおいては、人間は独立して自由に自律的な道徳判断ができる能力を備えた理性的な存在としてとらえら

れている。

こうした人間観には次の3つの問題が指摘できる。まず第1点目の問題としては、人間を生得的に道徳的な判断を行える能力を備えているとすることは、反道徳的な行為をした人間を排除してしまい、問題をその個人に閉じ込めてしまう危険性があるという点があげられる。第2の問題としては、人間と言うものを独立し自律的であるとしてしまうと、道徳が交渉され道徳性の発達が達成される場である他者との相互作用という場が軽視されてしまうという点がある。そして第3の問題としては、道徳的な判断とは決してある個人が自由に行えるものではないという点がある。なぜならそこにはさまざまな制約が存在しているからである。

4.2 道徳性と人間の関係性再考

こうした従来の道徳性研究が抱く人間観は、そのまま従来の心理学研究が抱いてきた人間観と重なっている。そして近年、こうした人間観から脱却し、新しい人間観を再構築しようと言う動きが、社会文化的アプローチを中心に起こり始めてきている。ここでは、そうした動きを抑えつつ、道徳性と人間の関係性を考えてみたい。

上述したように、伝統的には、道徳的な人間とは、その心の中に、道徳的判断能力を備えた理性的・合理的な存在であり、逆に非道徳的な人間とは、そうした能力が備わっていたにもかかわらずあえてそういう行為をしたか、もしくは何らかの理由によりそういう能力が欠如した人間であるとされ、その個人のみが罰せられてきた。こうした人間観はチャールズ・テイラー (Taylor, 1985) のいう「遊離した自己イメージ (disengaged image of the self)」に他ならないだろう。

しかし社会文化的アプローチにおいては人間は、環境に対して完全に自由な存在でもなければ、完全に受動的な存在でもない。人間は媒介された行為によって常に環境に対して働きかける存在である。また人の能力というものをその人に実体として内在するようにとらえる個体能力主義を否定する (石黒, 2004)。

こうした社会文化的アプローチの観点から道徳性と人間の関係を再考するならば、まず人間は決して自由に道徳的判断を行うことは出来ないし、道徳的な責任を完全にその個人に帰属して考えることもできないだろう。

こうした人間観の転回は、道徳的な問題を個人のみに押しやってしまうのではなく、その問題を生じさせ可視化されたより広い文脈や関係性に焦点を当

て、その問題を根本から解決するためにきわめて重要な意義を持つであろう。

5. 道徳性の発達

5.1 相互作用をめぐるピアジェとヴィゴツキーの立場の違い

道徳性の発達というものを考える際には、他者や社会との関係はずすことは出来ないだろう。個人が他者や社会と関係をする具体的な場は、相互作用場面に他ならない。

佐藤 (1996) が指摘しているように、ピアジェもヴィゴツキーも相互作用を人間の認識活動の中心としてとらえ、そうした相互作用の結果として知識と言うものが成立・発展していくと考えていたという点で、相互作用論者である。Bidell (1988) は、二人は発達を弁証法の立場から論じるという基本的な枠組みを共有していたと述べている。しかし、両者には重要な相違点もいくつか存在している。では道徳性の発達に重要な意味を持つこの相互行為の理解をめぐる二人の相違点は何だろうか。

道徳性の発達を心理学研究の組上にのせたのはピアジェであったといつてよいだろう。ピアジェは1932年に『児童の道徳的判断の発達』を著し、ここでは「結果論から動機論へ」というタームで要約される道徳性の発達モデルに加えて、マールゲームのような規則や社会規則の獲得を他者との相互作用の観点から考察している。ピアジェは個人の認識を研究対象としていたが、道徳と言うものは他者を抜きにしては考えることが出来ないものとしてとらえており (吉岡1992)、それゆえ他者との相互作用は道徳性の発達にとって極めて重要な意味を持っていると考えていた (佐藤, 1999)。ピアジェは、道徳判断についてある基準を持っていた子どもが、それとは違う基準を持っている同年齢の子どもと相互作用することで、その子どもは自分とは別の見方があることに気づき、認知的な葛藤が生じて、その結果、道徳的判断基準を変化させていくことになり、道徳性が発達していくように考えた。よって、ピアジェにとって、他者との相互作用とは、個人の内部で認知的な葛藤を生じさせ、道徳性を発達させるリソースなのである。

ここで注意しなくてはいけないのは、ピアジェは相互作用を、個人の中に認知的葛藤が作られるためのきっかけとしかとらえておらず、しかも相互作用は制約を受けずに自由に展開するような理解をしている点である。ピアジェは、まず他者との相互作用というきっかけによって、個人の中に認知的葛藤が

生じ、それにより引き起こされる「同化－調整」「均衡化」という作用によって、道徳性が発達すると考えており、結局は個人の内部の認知構造の変化に還元してしまうのである。佐藤（1999）が指摘しているように、ピアジェにとって発達の内実とは社会文化から与えられるものではなく、あくまで個人の内部に存在しているものなのである。

しかしヴィゴツキーは相互作用をピアジェのように、単に個人の認知構造を変化させるきっかけとしてはとらえず、それは認知構造に直接影響を与え、しかもそれは新しい知識の形成の場であるにとらえるのである。それゆえ、ヴィゴツキー派では相互作用の展開も社会や文化から強い制約を受けるとされ、相互作用は決して自由に展開するものではないと考えるのである。つまり、ヴィゴツキーは発達の内実とは個人ではなく、社会や文化から与えられると考えたのである。ヴィゴツキー派の研究では、この相互作用の分析に重きをおいたものが多い。

5.2 道徳性の発達と最近接発達領域

上で述べたように、ピアジェもヴィゴツキーも、道徳性に限らず精神機能の発達にとって、相互作用が重要であるという認識は一致していた。しかしその相互作用の捉え方においてはかなり異なっていた。その違いは相互作用が成立するためのパートナーの条件にも現れている。

ピアジェは、相互作用が精神の発達にとって理想的に機能するためのパートナーとしては、同じ年齢や認識の類似した者どうしを考えていた。もしもパートナーが自分とは余りにもかけ離れている相手では、そもそも葛藤自体生じないので、意味が無いとされる。つまりピアジェは相互作用をあくまで「水平的な」（Hartup, 1989）次元だけでとらえており、大人やより発達の進んだものとの相互作用、つまり「垂直的な」相互作用は扱われていないのである。だから石黒（2004）が指摘しているように、ピアジェは大人がかかわる教育というものを「ノイズ」と考えており、教育の役割を軽視していた。佐藤（1999）はこのような、大人や教師の役割を全く考慮していない点は、ピアジェの相互作用論で最大の問題としている。

これに対して、ヴィゴツキーは「最近接発達領域（zone of proximal development: ZPD）」という概念を提唱して、より熟達したパートナーとの相互作用を通じて、人間の認知発達は進んでいくと主張した。これは具体的には、はじめは外部にあった大人の助言や教育的な働きかけと言うものが、相互作用を通じて、やがて子どもの内部に取り込まれ、自己

のものとして内化していく過程である。しかし、このZPDの概念はこれまでわが国だけではなく欧米においても、単に教育の役割を重要視している概念であるというように誤解されてきた（Griffin & Cole, 1984）。それゆえ、ZPDはしばしば「早期教育」や「教え込み」を正当化するための概念ツールとして用いられてきた歴史がある（佐藤, 1995）。

しかし、ヴィゴツキーが主張したのは、まず教育と言う活動は、「教えること」と「学ぶこと」が相補的で不可分な関係を持っている活動であり、決してヴィゴツキーにとって「教育」とは「教えること」という一方的なものではないのである。またここでは文化的に意義を持ち価値のあるものが志向される。つまり、ZPDは社会文化的な影響を強く受けるものであり、決して「真空の中で」（ヴィゴツキー, 1962）起こっているものではないのである。近年、このような理解に基づいて、ZPDを再検討しようという試みも始まっている（例えば、Wells, 1999）。

では、ヴィゴツキーのZPDのアイデアを道徳性研究に生かす意義はどこにあるのか。それは、本研究で採用している道徳観との関係においてである。上述したように本研究では道徳を普遍的な存在としてではなく、社会文化的に構築されていくものにとらえた。そしてそれが構築されていく場合は社会文化的アプローチの場合は、同レベルの相手はもちろん、年上もしくは熟達の進んだ相手との相互作用においてであった。こうした道徳を構築および交渉していく相互作用場面こそ、まさにZPDが生じている場ではないだろうか。そしてその具体的な場こそ、教室における道徳教育ではないだろうか。

このように、教育を「ノイズ」ととらえたピアジェと比較して、ヴィゴツキーのZPDのアイデアは道徳教育に極めて有望なインプリケーションを持っているのである。

6. まとめと今後の課題

本研究は現在、行き詰まり感のある道徳性研究に関して、ひとつの新しい可能性として社会文化的アプローチの見地から、道徳性研究をデザインする目的で行われ、まず現在我々が自明とみなす道徳観をあえて疑い、道徳というものを社会文化の中で人々がその意味を構築していくものにとらえた。そしてその前提から、従来の道徳性研究が自明としていた「人間」や「相互行為」という諸概念を再検討した。そして社会文化的アプローチによる道徳性研究が、道徳性研究はもちろん、道徳教育の実践にとって

も、非常に豊かなインプリケーションを持っていることが示唆された。しかし、まだ社会文化的アプローチから実証的に行われた道徳性研究はまだ少なく (Buzzelli, 1993; Tappan, 1998)、今後実証的な研究成果により、さらに補強していく必要がある。

まさに道徳性の「実践のエスノグラフィー」(茂呂, 2001) が待たれているのである。

引用文献

- 東 洋 (1997). 日本人の道徳意識 - 道徳スクリプトの日米比較 柏木恵子編 文化心理学 - 理論と実証 東京大学出版会, pp.88-108.
- Bidell, T. (1988). Vygotsky, Piaget and the dialectic of development. *Human Development*, 31, 329-348.
- Buzzelli, Cary. A. (1993). Morality in context: A sociocultural approach to enhancing young children's moral development. *Child and Youth Forum Quarterly*, 22, 375-386.
- Chomsky, N. (1966). *Cartesian linguistics: A chapter in the history of rationalist thought*. Harper and Row. (チョムスキー, N. 川本茂雄 (訳) (1970) デカルト派言語学 - 合理主義思想の歴史の一章 テック)
- Gergen, K.J. (1994). *Toward Transformation in Social Knowledge*. Sage Publications. (ケーガン, K.J. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 (監訳) (1998) もう一つの社会心理学 ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1994). *Realities and Relationships Soundings in Social Construction*. Harvard University Press. (ケーガン, K.J. 永田素彦・深尾誠 (訳) (2004) 社会構成主義の理論と実践 - 関係性が現実をつくる - ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1999). *An Invitation To Social Construction*. Sage Publications. (ケーガン, K.J. 東村知子 (訳) (2004) あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
- Griffin, P. & Cole, M. (1984). Current activity for the future: The Zo-ped. In B. Rogoff & J.V. Wertsch (Eds.), *Children's learning in the zone of proximal development: New directions for child development (No.2)*. Jossey-Bass.
- Hartup, W. (1989). Social relationship and their developmental significance. *American Psychologist*, 44, 120-126.
- Holquist, M. (1994). The reterritorialization of the enthymeme. *Paper presented at the International Conference on "Vygotsky and the Human Science"*. Moscow.
- 石黒広昭 (編著) (2004). 社会文化的アプローチの実際 - 学習活動の理解と変革のエスノグラフィー - 北大路書房
- 岩下豊彦 (1999). 心理学 金子書房
- Kohlberg, L. (1987). *MORAL STAGES AND MORAL EDUCATION*. (コールバーグ, ローレンス. 岩佐信道 (訳) (1987). 道徳性の発達と道徳教育 - コールバーグ理論の展開と実践 広池学園出版部)
- Locke, John. (1852). *An Essay Concerning Human Understanding*. Philadelphia (ジョン・ロック. 加藤卯一郎 (訳) (2005). 人間悟性論 一穂社)
- MacIntyre, A. (1984). *After virtue*. 2nd ed. University of Notre Dame Press. (マッキンタイア, アラスデア. 篠崎栄 (訳) (1993). 美徳なき時代 みすず書房)
- 丸山真男 (1961). 日本の思想 岩波書店.
- 松嶋秀明 (2005). 関係性の中の非行少年 - 更生保護施設のエスノグラフィーから - 新曜社.
- 茂呂雄二 (2001). 実践とエスノグラフィの意味 茂呂雄二 (編著) 実践のエスノグラフィ 金子書房, pp.1-19.
- 中戸義雄・岡部美香 (編著) (2005). 道徳教育の可能性 - その理論と実践 - ナカニシヤ出版.
- Piaget, J. (1932). *Jugement morale chez l'enfant*. Alcon. (ピアジェ, J. 大伴茂 (訳) (1955). 児童の道徳的判断の発達 (臨床児童心理学Ⅲ) 同文書院)
- 佐藤公治 (1996). 認知心理学からみた読みの世界 - 対話と協同的学習をめざして 北大路書房.
- 佐藤公治 (1999). 対話の中の学びと成長 金子書房.
- 田島信元 (2003). 共同行為としての学習・発達 金子書房.
- Tappan, Mark. B. (1998). *Moral education in the zone of proximal development*. *Journal of Moral Education*, 27, 125-145.
- Tappan, Mark. B. (2006). Mediated moralities: Sociocultural approaches to moral development. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Taylor, C. (1985). *Human agency and language*:

- Philosophical Paperl.* Cambridge University Press.
- ヴァイゴツキー, L.S. (1962). 柴田義松 (訳) 思考と言語 (上下) 明治図書.
- Wells, G. (1999). *Dialogic inquiry: Towards a sociocultural practice and theory of education.* New York: Cambridge University Press.
- Wertsch, James. V. (1991). *Voices of the Mind: A Sociocultural Approach to Mediated Action.* Harvard University Press. (ワーチ, ジェームス. V. 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 (訳) (2004) 心の声-媒介された行為への社会文化的アプローチ- 福村出版)
- Wertsch, James. V. (1998). *Mind as Action.* Oxford University Press. (ワーチ, ジェームス. V. 佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子 (訳) (2002) 行為としての心 北大路書房)
- 吉岡昌紀 (1992). 認知的発達理論-ピアジェ 日本道徳性心理学研究会 (編著) 道徳性心理学-道徳教育のための心理学 北大路書房, pp.29-46.

謝 辞

本研究を実施するにあたって、突然の日本からの論文のリクエストにもかかわらず、快く論文をメールで送ってくださった、アメリカのColby大学のMark. B. Tappan先生と、同じくアメリカのインディアナ大学のCary. A. Buzzelli先生には深く感謝いたします。

(受稿3月22日：受理5月18日)